

臨床実地問題 50 問(解答時間 2 時間)

- 1 網膜の組織像を別図 1 に示す。
どの部位の組織像か。
a 中心窩 b 赤道部 c 周辺部 d 黄斑部の耳側 e 黄斑部の鼻側
- 2 84 歳の男性。1 年前から左下眼瞼に腫瘤が出現し、徐々に増大したため来院した。左眼の外眼部写真と病理組織像を別図 2A, 2B, 2C に示す。
診断はどれか。
a 脂腺癌 b 基底細胞癌 c 悪性黒色腫 d 母斑細胞母斑 e 脂漏性角化症
- 3 48 歳の女性。1 年前から左眼の違和感を自覚していた。近医を受診し、結膜の色素沈着を指摘され、紹介されて来院した。初診時の前眼部写真と結膜病変部の生検組織像を別図 3A, 3B に示す。
診断はどれか。
a 霰粒腫 b 悪性黒色腫 c 母斑細胞母斑 d 悪性リンパ腫 e メラノサイトーシス
- 4 涙道内視鏡手術後の涙道再閉塞と閉塞部位の関連について、患者診療録を調べて論文発表予定である。結果を別図 4 に示す。
正しいのはどれか。2 つ選べ。
a 介入研究である。
b 倫理委員会に申請が必要である。
c 鼻涙管に比べて涙小管が閉塞している方が再閉鎖率が高い。
d 涙道内視鏡手術成績と閉塞部位の関連をみるために t 検定を行う。
e 涙道内視鏡手術成績と閉塞部位の関連をみた Kaplan-Meier 曲線である。
- 5 第 2 子を出産したばかりの母親が遺伝相談に来院した。第 2 子に異常を認めない。第 1 子の右眼眼底写真と超音波 B モード像を別図 5A, 5B に示す。第 1 子の左眼は眼球摘出している。
第 2 子に対する母親への正しい指導はどれか。2 つ選べ。
a 定期的に眼底検査をしましょう。
b 定期的に小児科で診察を受けましょう。
c 全身麻酔をして眼科検査を受けましょう。
d 学童期になったら眼科で精査をしましょう。
e 遺伝することを心配する必要はないでしょう。
- 6 81 歳の男性。徐々に増大する無痛性の右眼瞼腫脹を主訴に来院した。血中 IgG4 値 115.0 mg/dL。メチルプレドニゾロンコハク酸エステルナトリウム点滴静注(パルス)に反応はない。初診時の外眼部写真と生検組織像を別図 6A, 6B に示す。
診断はどれか。
a 脂腺癌 b 皮様嚢腫 c 悪性リンパ腫
d IgG4 関連眼疾患 e アミロイドーシス
- 7 29 歳の男性。3 週前から右眼の眼脂と違和感を自覚していた。市販の点眼薬を使用したのが症状が改善しないため近医を受診し、その後、紹介されて治療を行った。治療前と治療後 2 週の前眼部写真を別図 7 に示す。
行われた治療はどれか。
a 切除術 b 放射線照射 c 抗菌薬点眼
d マイトマイシン C 点眼 e 副腎皮質ステロイド点眼

- 8 38歳の男性。建設現場での作業中に生セメントが左眼に飛入した。直ちに大量の水道水で洗眼した後に、救急外来を受診した。左眼前眼部写真とフルオレセイン染色写真を別図 8A, 8B に示す。
本症例が適切に治療された場合の予後はどのように推定されるか。
- a 瞼球癒着により眼球運動障害を生じる。
 - b ほぼ後遺症なく治癒し、視機能も保たれる。
 - c 下方角膜の混濁と不正乱視を生じて視力が低下する。
 - d 下方角膜への結膜侵入を生じるが視機能への影響は少ない。
 - e 角膜上ほぼすべてが結膜上皮化して著明な視力障害を生じる。
- 9 17歳の男子。顔面に重症アトピー皮膚炎を認める。近医で免疫抑制点眼薬(0.1%タクロリムス水和物点眼薬)を処方されている。最近、眼痛と充血が強くなり来院した。眼瞼結膜と前眼部写真およびフルオレセイン染色写真を別図 9A, 9B, 9C に示す。
適切な処置はどれか。
- a アシクロビル眼軟膏を追加処方する。
 - b 副腎皮質ステロイド点眼を追加処方する。
 - c 免疫抑制薬点眼を中止し、抗菌薬点眼を処方する。
 - d 免疫抑制薬点眼を中止し、アシクロビル眼軟膏を処方する。
 - e 免疫抑制薬点眼を中止し、ヒアルロン酸ナトリウム点眼を処方する。
- 10 78歳の女性。昨日から右眼の視力低下を自覚し、起床時に多量の眼脂があったため来院した。5年前、両眼に手術が施行され、20年来緑内障のため通院している。視力は右0.04(矯正不能)。眼圧は右18 mmHg, 左16 mmHg。右眼前眼部写真を別図 10A, 10B に示す。
疑われる疾患はどれか。
- a 結膜腫瘍 b 濾過胞感染 c サルコイドーシス
 - d 白内障術後眼内炎 e 急性前部ぶどう膜炎
- 11 62歳の女性。近医で角膜に異常があると指摘され、紹介されて来院した。これまで強い充血や眼痛が続いたことはない。左眼前眼部細隙灯顕微鏡写真と前眼部 OCT 像を別図 11A, 11B に示す。右眼にも軽度の類似所見を認める。
診断で適切なのはどれか。
- a 角膜軟化症 b Mooren 角膜潰瘍 c フリクテン角膜炎
 - d Terrien 辺縁角膜変性 e 角膜上皮幹細胞疲弊症
- 12 16歳の男子。1か月前から右眼の異物感と霧視を認める。近医で抗菌薬、副腎皮質ステロイド点眼を受けたが軽快せず、紹介されて来院した。右眼前眼部写真を別図 12 に示す。
この疾患で正しいのはどれか。
- a 外科的処置は行わない。
 - b 角膜内皮が著明に減少する。
 - c 抗真菌薬点眼が最も有効である。
 - d ソフトコンタクトレンズ装用者に多い。
 - e 病辺は周辺部から中央に向かって進展する。
- 13 65歳の女性。20年前ごろから両眼の羞明と視力低下を生じ、最近さらに視力が低下したため来院した。右眼前眼部写真を別図 13 に示す。
正しいのはどれか。2つ選べ。
- a 両親のいずれかが同じ疾患である。
 - b 角膜移植を行えば再発は起こらない。
 - c TACSTD2(MISI)遺伝子の異常がある。
 - d 沈着物はコンゴレッド染色で赤く染まる。
 - e 治療的レーザー角膜切除術(PTK)の良い適応である。

- 21 39歳の男性. 2週前から左眼の視力低下を自覚し近医を受診, 眼底の異常を指摘されて来院した. 視力は右0.2 (1.0×-2.50 D), 左0.1(0.6×-2.50 D). 眼圧は正常. 右眼の眼底に異常はない. 左眼眼底写真, OCT像, フルオレセイン蛍光眼底造影写真, インドシアニングリーン蛍光眼底造影写真を別図21A, 21B, 21C, 21Dに示す. 診断はどれか.
- a 黄斑部毛細血管拡張症 b 近視性脈絡膜新生血管 c 特発性脈絡膜新生血管
d 中心性漿液性脈絡網膜症 e pachychoroid neovascularopathy
- 22 56歳の女性. 2日前から右眼の霧視を自覚して来院した. 視力は右0.1(0.7×-2.50 D), 左0.3(1.2×-2.25 D). 眼圧は右24 mmHg, 左15 mmHg. 右眼には角膜後面沈着物を伴った軽度の虹彩炎がみられた. 副腎皮質ステロイド点眼が処方されたがさらに視力が低下したため, 4日後に再度来院した. 右眼眼底写真を別図22に示す. 治療に用いられるのはどれか.
- a アダリムマブ b シクロスポリン c インフリキシマブ
d メトトレキサート e バラシクロビル塩酸塩
- 23 46歳の男性. 昨日から左眼に違和感を自覚した. 今朝から左眼の視力低下と充血もみられるようになったため来院した. 視力は左0.1(0.4×-1.25 D). 数年前から無職であり, 健康診断等は受けていない. 左眼前眼部写真と点眼薬による治療開始後3日に撮影した眼底写真およびフルオレセイン蛍光眼底造影写真を別図23A, 23B, 23Cに示す. 診断に重要な検査はどれか.
- a HbA1c b 前房水PCR c ツベルクリン反応
d アンジオテンシン変換酵素 e ヒト白血球(型)抗原(HLA)
- 24 64歳の男性. 右眼の白内障手術目的で紹介されて来院した. 矯正視力は0.2. 眼外傷の既往はない. 細隙灯顕微鏡写真を別図24に示す. この疾患で正しいのはどれか. 2つ選べ.
- a Zinn小帯が脆弱である. b 角膜輪部疲弊症を合併する.
c 常染色体劣性遺伝形式で遺伝する. d PAX6遺伝子の異常が原因である.
e 房水産生低下に伴う低眼圧症を発症しやすい.
- 25 12歳の女兒. 低出生体重児であった. 右眼眼底写真を別図25に示す. 本症例にみられるのはどれか.
- a 強度遠視 b 偽内斜視 c 調節緊張 d 輻湊不全 e 陽性γ角
- 26 1歳2か月の女兒. 眼科健診のため来院した. 周産期, 発達に異常はない. 抗てんかん薬を内服しているが, コントロールは良好である. 全身麻酔下で検査を行ったところ, 眼圧は右24 mmHg, 左12 mmHg, 角膜横径は右12 mm, 左10.5 mm, 角膜厚は右620 μm, 左538 μmであった. 顔面写真を別図26に示す. 正しいのはどれか.
- a 脈絡膜血管腫を合併する.
b 上強膜静脈圧が低下している.
c 角膜厚で補正すると右眼の眼圧は正常である.
d プリモニジン酒石酸塩点眼の適応である.
e 線維柱帯切除術の適応である.
- 27 大型弱視鏡検査に用いるスライドのうち, 融像幅を測定する際に使用するのは別図27のどれか.
- a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤

- 28 5歳の男児. 就学前健診で右眼の視力不良を指摘されたため来院した. 視力は右0.4(0.8×+2.00 D ⊂ cyl+0.50 D Ax 90°), 左1.5(1.5×+0.50 D). 眼位は正位. 前眼部と眼底に異常はない. オートレフラクトメータと調節麻痺下の検影法の結果を別図 28A, 28B に示す.
適切な対応はどれか.
- 経過観察
 - 左眼遮閉1日2時間
 - トロピカミド点眼薬1日1回処方
 - 眼鏡処方, 右眼+2.00 D ⊂ cyl+0.50 D Ax 90° 左眼 plan
 - 眼鏡処方, 右眼+4.00 D ⊂ cyl+0.50 D Ax 90° 左眼+1.00 D
- 29 64歳の女性. 1か月前に交通事故で頭部を打撲し意識消失し入院した. 意識回復後から複視を自覚したが, 退院後も改善がないため, 治療を求めて来院した. 視力は右0.5(1.0×-1.00 D ⊂ cyl-0.50 D Ax 170°), 左0.6(1.0×-0.75 D ⊂ cyl-0.75 D Ax 180°). 前眼部と中間透光体および眼底に異常はない. 瞳孔反応は正常である. 眼位写真を別図 29 に示す.
正しいのはどれか.
- 右への顔回しを好む.
 - 複視は交差性である.
 - プリズムは基底内方に入れる.
 - 水平筋の前後転術の適応である.
 - ボツリヌス毒素注射の適応である.
- 30 16歳の男子. 半年前から遠くのボールが二重に見えるのに気づき来院した. 2年前からスマートフォンを長時間見ている. 視力は右0.03(1.2×-9.00 D), 左0.04(1.2×-8.50 D). 前眼部と中間透光体および眼底に異常はなく, 頭部画像診断でも異常所見はみられなかった. 近見での複視はない. 眼位写真と Hess 赤緑試験の結果を別図 30A, 30B に示す.
治療で誤っているのはどれか.
- Jensen 法
 - 外直筋短縮術
 - 内直筋後転術
 - プリズム眼鏡装用
 - ボツリヌス毒素療法
- 31 色覚検査の結果を別図 31 に示す.
考えられるのはどれか. 2つ選べ.
- 1型2色覚
 - 2型2色覚
 - 3型2色覚
 - 杆体1色覚
 - 青錐体1色覚
- 32 17歳の男子. 1か月以上前から右眼の視野中央にかすみがあり, 1週間前から左眼も軽度の霧視を自覚して来院した. 視力は右0.04(矯正不能), 左0.9(矯正不能). フルオレセイン蛍光眼底造影写真では乳頭からの色素漏出はなく, 眼痛と頭痛もない. ステロイドパルス療法を受けたが視力は改善しなかった. 両眼の眼底写真と Goldmann 視野検査の結果を別図 32A, 32B に示す.
最も考えられるのはどれか.
- うっ血乳頭
 - Leber 遺伝性視神経症
 - 動脈炎性虚血性視神経症
 - 多発性硬化症に伴う視神経炎
 - 抗アクアポリン4抗体陽性視神経炎
- 33 58歳の女性. 時々右眼がかすみとのことで来院した. 視力は右0.9(1.2×-0.50 D), 左0.8(1.5×-0.50 D). 前眼部と中間透光体に異常を認めないが, 右眼の眼底のみに異常を認める. 初診時の右眼眼底写真と右眼 Humphrey 視野(30-2 プログラム)検査の結果および軸位断 MRI 画像を別図 33A, 33B, 33C に示す.
最も考えられるのはどれか.
- 右視神経炎
 - 右視神経周囲炎
 - 右視神経鞘髄膜腫
 - 右 IgG4 関連眼疾患
 - 右甲状腺性視神経症
- 34 52歳の男性. 右眼瞼下垂と複視を自覚したため来院した. 視力は右0.6(1.0×+0.75 D), 左1.0(矯正不能). 正面と9方向眼位写真および前眼部写真を別図 34A, 34B に示す.
この症例の MRI 画像は別図 34C のどれか.
- Ⓐ
 - Ⓑ
 - Ⓒ
 - Ⓓ
 - Ⓔ

- 35 76歳の男性。頭頂部から球後にかけての突然の激痛のため来院した。低濃度フェニレフリン塩酸塩点眼前後の写真を別図35に示す。
診断はどれか。
a 片頭痛 b 外眼筋炎 c 内頸動脈解離 d くも膜下出血 e Tolosa-Hunt 症候群
- 36 75歳の男性。前眼部写真を別図36Aに示す。
隅角所見は別図36Bのどれか。
a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤
- 37 70歳の男性。基礎疾患として糖尿病と腎機能障害がある。眼圧は右15 mmHg, 左40 mmHg。左眼霧視と眼痛を自覚している。左眼角膜写真を別図37に示す。
適切な治療はどれか。2つ選べ。
a ピロカルピン塩酸塩点眼 b アセタゾラミド内服 c レーザー虹彩切開術
d 汎網膜光凝固 e アフリベルセプト硝子体内注射
- 38 82歳の女性。昨夜から左眼眼痛があり来院した。視力は右0.4(0.8×-1.00 D), 左30 cm 指数弁(矯正不能)。眼圧は右15 mmHg, 左52 mmHg。内眼手術の既往はない。両眼の前眼部OCT像を別図38に示す。
左眼の診断として可能性があるのはどれか。2つ選べ。
a 落屑症候群 b 悪性緑内障 c プラトー虹彩
d 鈍的眼外傷の既往 e 原発閉塞隅角緑内障
- 39 正常眼圧緑内障の視神経乳頭所見を別図39に示す。
今後の経過観察によって、網膜神経線維層欠損が出現し拡大する可能性が最も高い位置と方向はどれか。
a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤
- 40 18歳の男子。軟式野球の試合中に自打球が右眼に当たったため来院した。視力は右0.4(1.2×-0.50 D ⊂ cyl -0.25 D Ax 90°)。眼圧は右12 mmHg。右眼角膜写真を別図40に示す。
正しいのはどれか。
a 異常なし b 虹彩離断 c 隅角後退
d 新生血管 e 毛様体解離
- 41 76歳の男性。両眼の白内障手術を施行され、左眼の視力は緑内障で指数弁まで低下していた。朝、洗顔時に左手指で左眼眼球を突き、視力低下、眼痛が出現したため来院した。矯正視力は右1.0, 左眼光覚なし。眼圧は左測定不能。左眼前眼部写真を別図41に示す。
適切な処置はどれか。
a 眼瞼縫合 b 硝子体手術 c 眼球内容除去
d 眼圧下降薬投与 e コンタクトレンズ装用
- 42 70歳の男性。偽水晶体性水疱性角膜症に対して角膜内皮移植術(DSAEK)を施行し、前房内に空気を残して終了した。術後3時間の診察時、患者は嘔気を訴えた。細隙灯顕微鏡写真を別図42に示す。
適切な処置はどれか。
a 空気の除去 b 仰臥位安静 c 緑内障治療薬点眼
d 高浸透圧薬点滴静注 e 副腎皮質ステロイド点滴静注
- 43 74歳の女性。角膜実質炎後の角膜混濁に対し全層角膜移植を3年前に受けた。半年前に連続縫合糸が断裂したため全抜糸を受けたところ、眼鏡矯正視力が悪化した。角膜トポグラフィによる角膜屈折力の分布を別図43に示す。
乱視矯正のための処置として適切なのはどれか。2つ選べ。
a 再度連続縫合 b 1時と7時の端々縫合 c 4時と10時の端々縫合
d 1時と7時の弧状切開 e 4時と10時の弧状切開

- 44 5歳の女児。両眼の視力不良にて来院した。矯正視力は右0.2, 左0.06。眼圧は両眼ともに10 mmHg。眼底に異常はない。両眼の前眼部写真を別図 44A, 44B に示す。
適切なものはどれか。
a 手術 b 経過観察 c 眼鏡処方
d 縮瞳薬点眼 e コンタクトレンズ処方
- 45 52歳の女性。右眼白内障手術目的で来院した。視力は右0.3(0.6×-3.00 D)。右眼前眼部写真と角膜検査所見を別図 45A, 45B に示す。
適切な眼内レンズ度数計算式はどれか。
a Barrett TrueK b Haigis c Hoffer Q
d Holladay I e SRK/T
- 46 85歳の女性。約20年前に白内障手術を受けた。4~5年前から徐々に視力が低下したため来院した。矯正視力は左0.2。散瞳後の細隙灯顕微鏡写真を別図 46 に示す。
正しいのはどれか。
a 前房洗浄 b 角膜内皮移植術 c 眼内レンズ交換手術
d 経毛様体扁平部硝子体切除術 e Nd:YAG レーザーを用いた後囊切開術
- 47 75歳の女性。レーザー虹彩切開術の既往がある。右眼の白内障手術翌日の眼圧は17 mmHg。2日目の眼圧は31 mmHg。手術翌日と2日後の細隙灯顕微鏡写真を別図 47A, 47B に示す。
点眼治療を行ったが無効であった。次に選択すべきなのはどれか。
a 前房形成術 b 硝子体切除術 c 周辺虹彩切除術
d 線維柱帯切除術 e 眼内レンズ摘出術
- 48 54歳の男性。1週前に右眼の線維柱帯切除術を受けた。右眼眼底写真を別図 48 に示す。
適切な対応はどれか。
a 経過観察 b 網膜光凝固 c 眼球マッサージ
d レーザー切糸術 e ステロイドパルス療法
- 49 72歳の女性。眼圧は右36 mmHg。右眼前眼部 OCT 像を別図 49 に示す。
正しいのはどれか。2つ選べ。
a 経過観察 b 緑内障治療薬点眼 c レーザー虹彩切開術
d 隅角解離術 e 水晶体再建術
- 50 18歳の男子。網膜剝離手術中に術者が患者の頭側に立ち、別図 50A のようにマーキング(◎)を行った。倒像鏡による観察所見を別図 50B に示す。
円孔の位置に近いのは別図 50C のどれか。
a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤